

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2015 年
No. 46

2015年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2015 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第13回アジア・オセアニア性科学学会報告	1
性教育の歴史を尋ねる②	11
もっと知りたい男子の性⑤	12

今月のブックガイド	14
JASEインフォメーション	15

■第13回アジア・オセアニア性科学学会報告

性科学の知見と臨床・実践をつなぐ国際会議

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 教授
アジア・オセアニア性科学連合 役員
WAS 性の権利委員会 委員長

東 優子

■はじめに

2014年10月23日～25日、オーストラリア・ブリスベン市で第13回 AOFS 国際会議が開催され、17カ国から約140名が参集した。AOFSとはアジア・オセアニア性科学連合(Asia-Oceania Federation of Sexology)の略称で、1990年から同会議を隔年開催している。世界には、アジア・オセアニア(AOFS)のほか、アフリカ(AFSHR)、ヨーロッパ(EFS)、南米(FLASSES)、北米(NAFSO)の5大陸に性科学連合が存在し、それらすべてがWAS(World Association for Sexual Health)の加盟団体である。

■極彩色に彩られたブリスベン

美しく紅葉する日本を飛び立ち、降り立った南半球の季節は逆で、オーストラリアに春の訪れを告げる



ジャガランダの紫色の花が満開を迎えていた。もっとも、亜熱帯性気候に属するブリスベン／ゴールドコーストは1年を通して穏やかな気候で晴天率が高く、冬でも日中は半袖で過ごせるほどなのだという。

市の中心部では、翌月に開催されるG20首脳会議(主要19カ国と欧州連合の首脳が集合するサミット)に合わせ、各種イベントの準備が着々と進められていた。滞在2日目には、主要な建物を映像で照らす光と音の祭典「カラー・ミー・ブリスベン(Color Me Brisbane)」が始まり、極彩色に包まれて夜の街を散



光と音の祭典「カラー・ミー・ブリスベン」

歩するという楽しみが増えた。

■ 見栄えよりも中身で勝負

オージー（オーストラリア人の愛称）気質を表現するキーワードは、「のんびり」「気さく」「フレンドリー」「カジュアル」「おおらか（大雑把）」だという。2014年の国際エイズ会議（メルボルン）や2007年のWAS世界会議（シドニー）など、国際会議でオーストラリアを訪れるのはこれが4回目になるが、これまでそれを実感することはなかった。そもそも国際会議というのは、諸外国から来賓が招聘される外交の舞台でもあり、ホスト国は威信をかけて「面構え」を立派に整える。例えば、2004年のAOFSムンバイ大会の会場はインドを代表するタージマハル・ホテルで、コングレスバッグ（配布資料を入れる鞆）は牛革製のアタッシュケース、といった具合である。招待講演者や座長に趣向を凝らした記念品が贈呈される、というのも定番である。しかし、今回ばかりは勝手が違った。

コングレスバッグもなければ、会場設営も最小限で、メルキュール・ホテルには会場であることを知らせる看板類はなく、開会式会場の天井から「第13回AOFS国際会議」の横断幕が吊るされることもなかった。「おおらか（大雑把）」な運営スタイルに戸惑う場面がまったくなかったわけではないが、内容そのものは過去の会議よりもむしろ充実していた感がある。プレジデンシャル・ディナー（会長招宴会）にしても、ありがちな高級レストランに案内されるのではなく、会場はクラング（Jocelyn Klung）接遇委員長の自宅だった。自宅といってもテニスコートとプール付きの



開会式で、先住民族アボリジニの歓迎を受ける

豪邸なのだが、堅苦しい挨拶のまったくない雑然とした宴会は、ホームパーティそのものだった。「気さく」で温かいおもてなしが何よりのご馳走で、招待客の笑い声がたえることのない、心に残る夜を過ごした。

「見栄えよりも中身で勝負」のブリスベン大会の日程は、開会式前日に開催された2本のワークショップ（参加費5,000円を別途支払う）とウェルカム・パーティーを除けば、実質3日間である。午前9時から午後5時の間に基調講演、特別シンポジウム、一般演題（口頭発表）などが3会場で同時進行した。参加登録料にはランチが含まれていたので外出する必要もなく、モーニングティーやアフタヌーンティーの時間など、会場内には常に参加者同士が熱心に交流する姿があった。徹底的に「カジュアル」ながら、参加登録料が通常並（もしくはやや高め）の5万円だったのは、オーストラリアの物価高も影響しているのだろう。

■ 性科学の知見と臨床・実践をつなぐプログラム

メルボルン大会の大会長は、第18回WAS世界会議シドニー大会（2007年）の大会長も務めたマーガレット・レデルマン（Margaret Redelman）である。運営組織（ホスト団体）は、1970年代に創設されたオーストラリアの性科学協会SAS（Society of Australian Sexologists）で、2012年まではASSERT National（the Australian Society of Sexuality Educators, Research and Therapists）の名称で活動してきた。

今回のテーマは、「性科学の知見と臨床・実践をつ



(左から) レデルマン大会長、波多野義郎教授 (AOFS 役員)、クラング接遇委員長

なく」(From Podium to Practice) である。直訳すると「ポディウム (演壇・教壇) からプラクティス (実践) へ」となり、韻を踏んでいるところに発案者の工夫を感じる。

大会の特徴を輪郭づける基調講演は、異例の多さともいえる全9本で、以下のような内容だった (※講演タイトルに若干の修正を加えている)。

1. 短小ペニス症候群と醜形恐怖
2. トランスジェンダーと性の健康
3. 婦人科がんの性の諸問題
4. 母性 (出産・育児) とセクシュアリティ
5. マレーシアの女性とセクシュアリティ
6. 肥満がセクシュアリティに与える影響
7. 糖尿病と女性の性機能不全
8. 不妊とセクシュアリティ
9. 軍隊のありようと性の諸問題

ほとんどのテーマが「女性」で、演者のほとんどが医療従事者だった。招聘講演の常として、男性泌尿科医が大会長の時には男性の性機能障害に関する演題が多くなるといったように、大会長の専門性とネットワークが反映されたラインナップになる。今回の大会長であるレデルマンはシドニー在住の一般開業医で、セクシュアル・ヘルス領域のキャリアは30年を超える。得意分野は男女関係や、性にまつわる困難事例であるという。そして、彼女の右腕としてプログラム編成を取り仕切った科学委員長のフォックス (Christopher Fox) は、性機能不全やボディ・イメージに関わる問題を得意分野とし、メルボルンで開業しているセックス・セラピストである。彼は、シドニー大学医学部で「性の健康とカウンセリング」などの



接遇委員長の自宅で催されたアットホームなプレジデンシャル・ディナー (会長招宴会)

授業を担当する大学教員でもある。

オーストラリアには性科学を学ぶことのできる大学院が2つあって、医学大学院であるシドニー大学では、HIV や性感染症を中心とした「性の健康」に関するカリキュラムを履修することができる。一方、コーツ (Rosemary Coates) 前 WAS 会長が在籍するカーチン大学では、性科学 (セクソロジー) で修士の学位を取得することができる。彼女がその基礎をつくったとされるカリキュラムは、より学際性に富んだ内容になっている。共にブリスベン大会の後援団体に名を連ねるシドニー大学とカーチン大学は、いい意味で「ライバル」なのだという。

「メンズ・デー」と「ウィメンズ・デー」

開会式直後の基調講演「多様なペニス：短小ペニス症候群と醜形恐怖」で登壇したのは、WAS 会長のケヴァン・ワイリー (Kevan Wylie) である。英国の



(左から) 今福貴子氏 (日本性科学連合事務局長)、永井敦教授 (川崎医科大学)、小貴大輔教授 (東海大学)



シドニー大学で教鞭をとるフォックス氏（写真左）、オーストラリア初のトランス全国調査を実施したカーチン大学チームのドーティー氏（写真中）とティリー氏（写真右）

シェフィールド大学名誉教授である彼は、2008年にEFS（ヨーロッパ性科学連合）ゴールドメダルを受賞した性医学者で、シドニー大学をはじめ、世界中の大学に客員教授として招聘されている。今回は「短小ペニス症候群」(Small Penis Syndrome) について学ぶ機会が多く、ワイリー WAS 会長が担当したワークショップと基調講演以外にも、一般演題ではフォックス科学委員長が「男性にとって重要なペニスの大きさ」を口演した。

「短小ペニス症候群」というのは、男性が自分のペニスが小さいと思い悩む現象を指す。ペニスの大きさは、時代を問わず、人種や民族、文化の違いを問わず、世の男性たちの関心事であり続けている。ケヴァンが共同研究者と BJU International（英国泌尿器外科学会誌）に投稿した 2007 年の論文の一部は世界中の言語に訳され、インターネット上で紹介されている。この論文は、1942 年以降に発表された論文 50 本以上（世界中のペニス 1 万 2,000 本に関するデータ）を再分析したもので、世の関心はもっぱら「平均値」にあるようである。異性愛の男性が気になると思われる女性たちの反応については、ペニスの大きさではなく、男性のパーソナリティとルックスを重視するという調査結果もあるのだが、男性たちが苦悩を深める複合的要因は様々に存在する。醜形恐怖の域まで追い込まれると、身体変容を試みることもある。講演では、スクリーンいっぱいに「多様なペニス」が映し出され、歴史的概観と短小ペニス症候群を引き起こす社会・文化的要因、さらにはセラピーの実際が紹介され

た。

プログラム・ブックによれば、初日は「メンズ・デー」で、翌日が「ウィメンズ・デー」だという。なるほど、「男性の性の健康に関する最新知見」と「前立腺切除術後の性心理療法」に関するシンポジウムや「早漏に関する最新知見」に関するランチ・セッションなど、男性のセクシュアリティに関するプログラムが集中的に組まれていた。午後の一般演題でも、クリス氏が「ペニスの大きさ」について発表したほか、永井敦教授（川崎医科大学）が「前立腺肥大症患者におけるホルミウムレーザー前立腺核出術（HoLEP）後の性機能の変化」について口演した。

複数のプログラムが同時進行する学会では、すべての会場を回ることはできない。自分の口演（一般演題とシンポジウム）に加えて、学会役員としての仕事を抱えていた私は、翌日の「ウィメンズ・デー」を含め、多くの貴重な口演を聞き逃してしまった。

■ 日本からの参加者と研究発表

今回は、東京大学石丸径一郎研究室からの多くの院生が参加してくれたおかげで、オセアニアを除けば、日本からの参加が一番多かったのではないと思う。

以下に紹介するのは、国籍を問わず、日本に在住する参加者による口演やポスター発表である。紙幅の都合により、発表者名は登壇者のみとし、演題（英文）については意識した。

特別シンポジウム【性の権利宣言】

- ・東優子（WAS 性の権利委員会・委員長）「性の権利と人権：20 年における概念の発達と展開」

一般演題【LGBTIQ】

- ・東優子（大阪府立大学）「トランスジェンダーに関する文献（1990-2013）研究」
- ・大野諒太（東京大学大学院）「両性愛・同性愛の若い男性の性的指向アイデンティティの発達」

一般演題【女性】

- ・大川玲子（千葉医療センター）「千葉性暴力被害支援センター Chissat の取り組み」

一般演題【男性】

- ・永井敦（川崎医科大学）「前立腺核出術（HoLEP）後の性機能の変化」



東京大学の院生たちと大川玲子氏（日本性科学会会長／AOFS 会長＝当時）

一般演題【カップル】

- ・杜翊寧（東京医療保健大学大学院）「日本におけるレズビアン女性の妊娠阻害要因と医療従事者に求めるケアのニーズ調査」
- ・Dariusz P. Skowronski（セックスセラピスト）「日本における性心理療法の実用的意義」

一般演題【若者】

- ・石川由香里（活水女子大学）「性教育・インターネット・性規範：青少年の性行動に与える影響（第7回 JASE 性行動調査）」
- ・山本ベバリーアン（大阪大学）「性的リスクに対するまなざしの違い：英国における若年母・教師・保健師の比較」

ポスター発表

- ・小貫大輔（東海大学教授）「ブラジルにおけるお産のヒューマニゼーション運動」
- ・中島隆太郎（東京大学大学院）「自己分化と対人問題の関係にみるジェンダー差」
- ・白川さゆり（東京大学大学院）「親の再婚が子どもの性に与える影響」
- ・中澤智恵（東京学芸大学）「若者の性行動に影響する諸要因の分析（第7回 JASE 性行動調査）」
- ・片山皓絵（東京大学大学院）「日本のいじめにみるジェンダー差」
- ・小林良介（東京大学大学院）「嘔吐恐怖症のある人々の SNS コミュニティ利用とジェンダー差」
- ・清水郁子（東京大学大学院）「日本の大学生とジェンダーの平等に対する態度」

■ 若者を対象とした参加助成制度

性科学の裾野を広げていくためには、若者の参加が増えることが重要な課題になるが、とにかく国際会議への参加にはコストがかかり過ぎる。国際社会に存在する奨学金制度はもっぱら発展途上国のみを対象にしたものであるため、日本の若者や NGO 関係者がこれを利用できるということはほとんどない。

そこで AOFS 日本事務局では今回初めて、「参加助成制度」を設け、1) プリスペン大会で研究等の発表予定があること、2) 現在日本国に在住する、年齢 18～35 歳位の者であること、3) 大学等に所属する研究者または NPO 法人等で性の領域に関わる活動を行っている者について、3 人に各 10 万円を支給することにした。

厳選な選考の結果、選出されたのは、「WAS 若者円卓会議」を企画した柳田正芳氏（Link-R 代表／WAS 若者委員会）、大野諒太氏（東京大学大学院石丸研究室）、杜翊寧氏（東京医療保健大学大学院）の 3 名である。

こうした次世代を担う若手には、ぜひ海外に出て、異なる言語で「性」を語り、学ぶ機会に触れて欲しいと思う。異なる言語といっても、英語やスペイン語を使うという話ではない。同じ主題に関する研究でも、日本で当たり前を使う用語と国際社会で使用されている用語では大きく異なることがある。日本を「ガラパゴス化」させないためにも、国際社会の動向を肌身で感じてもらいたいと願っている。



2015 年の第 22 回 WAS 国際会議シンガポール大会での再会を誓う



改訂版「性の権利宣言」に関するシンポジウムで口演したWAS 前会長コーツ准教授（写真中）とWAS 性の権利委員会共同委員長を務める筆者（写真左）とパーラネン氏（写真右）

■ 国際会議で言語の違いに触れる

日本社会で定着している専門用語「性同一性障害（GID）」などは、「ガラパゴス化」の代表例である。仕事柄、「なんちゃって通訳」をすることも多いのだが、GID という精神疾患名を口にするのは、日本語を英訳する時ぐらいである。初日午後のダミアン・リグス（Damien Riggs）准教授による基調講演「トランスと性の健康（Trans Issues and Sexual Health）」と午後のシンポジウム「トランス・ピープルの健康とウェルビーイング（The Health and Well-being of Trans People）」においても、「性同一性障害者」に当たる用語が使用されることは、ついぞなかった。

豪州アデレードにあるフリンダー大学でソーシャルワークを教えるリグス准教授は、ジェンダーの多様な若者に対する心理療法を行う臨床家でもある。彼は、「トランスジェンダー」というカテゴリーで把握されている人々に関わるメンタル・ヘルスの専門家には、その多様なありようを理解し、ストレングス・モデルの視点で社会資源やスキルへのアクセスを高めていくことが求められる、と述べた。

また、これに続くシンポジウムでも、オーストラリア初となるトランス全国調査を実施したカーチン大学チームが、多様な当事者の実態を紹介した。さらに行動提案として、GID や GD（性別違和）といった疾患概念の再検討（脱精神病理化）の必要性を訴えた。

ある現象に対する理解が深まることで、新しい言語（用語）が次々と生まれる。情報化社会に生きてい

ば、インターネットでこうしたトレンドを把握することも不可能ではないが、時代の変化を肌感覚で感じられるのが国際会議の醍醐味でもある。

■ 「改訂版・性の権利宣言」

最後に、WAS 特別企画として「改訂版・性の権利宣言」に関するシンポジウムが開催されたことを報告しておきたい。

WAS「性の権利宣言」といえば、1999 年の香港大会総会で採択されたものが有名だが、それを大幅改訂したものが2014 年3 月に諮問委員会によって承認された。さらにこのメルボルン大会の開催に合わせて各国語の翻訳版を発表することになり、性の権利委員会の共同委員長である私とフィンランドの性哲学者であるパーラネン氏（Tommi Paalanen）は、会議が始まってなお、翻訳者・監訳者との確認作業に追われることになった。日本語版の監訳についても、実は会議に参加していた山本ベバリーアン教授（大阪大学）、山中京子教授（大阪府立大学）、小貫大輔教授（東海大学）らにお願いした次第である。

シンポジウムでは、私たち2 人が「性の権利：20 年における概念の発達と展開」と「改訂版のポイント」について解説したほか、WAS 前会長のコーツ准教授（カーティン大学）が「性の権利概念と WHO」について口演した。なお、日本語版を含めた「改訂版・性の権利宣言」は、WAS の公式サイトで全文を入手することができる。

■ 2015 年は、シンガポール

2 日目夜には AOFS 理事会・総会があり、第 14 回 AOFS 国際会議が韓国で2016 年3 月31 日～4 月3 日に開催されることが改めて確認された。その前に、第 22 回 WAS 国際会議シンガポール大会（2015 年7 月25 日～28 日）が控えている。

演題申込はすでに始まっており、3 月31 日に締め切られる。参加登録料が割引となる団体登録や団体旅行に関する案内はまだ先のことになるが、この『現代性教育研究ジャーナル』に掲載されるはずである。この報告書を読んで、少しでも関心を持ってくださる方が増えれば、こんな嬉しいことはない。

■第13回アジア・オセアニア性科学学会報告

「YOUTH ROUND TABLE (若者円卓会議)」を主催して

若者世代にリプロヘルスサービスを届ける会 (Link-R) 代表
WAS YOUTH INITIATIVE (世界性の健康学会若者委員会) メンバー

柳田 正芳

■はじめに

2014年10月25日、第13回アジアオセアニア性科学学会の中で、WAS YOUTH INITIATIVE (世界性の健康学会 若者委員会) が主催する「YOUTH ROUND TABLE (若者円卓会議)」が開かれました。

その若者円卓会議について報告します。

私は、普段は東京を中心に、思春期リプロに関する活動などを行っています。学校に講演や講義に伺うこともあれば、保健師さんや養護教諭の先生など「中高生や大学生をサポートしている大人」に向けてお話させていただくこともあります。大人のみなさまに話をするとき、必ず聞いているのがこの一言。「若者の話、ちゃんと聴けてますか？」

ちゃんと聴く、という表現にはかなり主観が入っているので、反応が分かれます。胸を張る人、ハッとする人、迷う人……。その反応に、私自身もいろいろな気づきやわが身を振り返る機会をいただいています。

今回、2014年10月に開催された第13回アジア・オセアニア性科学学会の中で、若者円卓会議という集まりを主催しました。

■ WAS YOUTH INITIATIVE
(世界性の健康学会若者委員会)

WAS (世界性の健康学会) の中の公式な委員会の1つが YOUTH INITIATIVE (若者委員会) です。世界各国の35歳くらいまでのユースがメンバーとして活躍しています。私もこの委員会のメンバーの1人です。この委員会は2011年のWAS総会で設立を承



若者円卓会議の様子

認された比較的新しい委員会です。若者世代の声を WAS の運営により反映させることなどを目的に結成されました。YOUTH INITIATIVE のリーダーはアントン (Antón Castellanos Usigli) というメキシコ人の20代の男性です。YOUTH INITIATIVE の結成も、Anton が企画し働きかけることで実現しました。彼は現在、WAS の諮問委員などの役職にも就いています。

部会として力を入れている活動が、性科学会での若者円卓会議です。円卓会議は、性の分野の若者活動家などが参加して、若者の性の健康を促進するためにどんなことができるかなどを話し合う場です。

WAS の世界学会は2年に1回開催されています。世界学会の開催のない年は、世界の5大陸で地域別の性科学学会が開催されます (例えば日本は、アジア・オセアニア性科学学会が開催される地域に属しています)。YOUTH INITIATIVE が設立された翌年 (2012年) は地域別の学会が開催された年で、この年にはアジアオセアニア、ヨーロッパ、ラテンアメリカの3つの地区の学会で若者円卓会議を開催しました。

■円卓会議が開催されるまで

2014年4月から今回の円卓会議の企画が始まりました。リーダーのアントンとメールとSkype（ネットを介したテレビ電話）で連絡を取り合い、準備を進めてきました。YOUTH INITIATIVEは「これをやりたい」と提案すると、提案者が中心となって進めるシステムをとっています。今回の円卓会議は私が提案して動き出しました。

実際にアジアオセアニア地区の学会に来られそうだったのは、アントン（YOUTH INITIATIVEの活動のほぼすべてに参加しています）と日本人の私くらいでしたので、2人で話し合って進めました。

最初に内容の確認です。この円卓会議は2年前（2012年）にも開催していたため、そのときの内容を元に発展させる形で開催しようということになりました（2012年の様子は後述しています）。言いだしっぺの私がAbstract（概要書）の執筆を担当したのですが、何度も書き直し、何度もアントンと話し合いを重ねました。最終的には、WASが2014年に新たに公表した新版「性の権利宣言」に関連付けて議論をしようということに落ち着きました。

Abstract（概要書）をオーストラリア・ブリスベンの学会事務局に送りました。Abstractの提出や会場と日時の確保などの事務的なやり取りのほか、参加者確保への協力についても先方から言及がありました。勝手の分からない海外での国際会議開催、参加者確保を手伝ってもらえるのはとてもありがたいことでした。

ところが、参加者がなかなか集まりませんでした。目標としては10人程度の参加を考えていました。アントンと手分けしていろいろと手を尽くしました。ネット上からエントリーできるオンライン申し込みのフォームを作りました。日本から行く参加者向けに日本の事務局から情報を流していただく機会がありました。現地の関係者にも「どなたか紹介して下さい」とメールを送りました。また昔ブリスベンに留学していた経験を持つ知人に声をかけ、「現地の友達に声をかけて欲しい」と頼みました。1、2名ずつ参加者は増えましたが、10名には届きそうもありませんでした。

「このままいくと、円卓会議なのに卓を円で囲めない人数の会議になるな」などと不毛なことを考え始め

ていたわけですが、同時にどこかで「まあ、これだけやったんだし、最後の瞬間にはまた別の誰かが加わってくれるでしょ。そういうものだ」という根拠のない自信も芽生えていました。現地でも参加者募集ができるように簡単なフライヤーを作って印刷したものを鞆に詰めました。

そうした準備を整えて、私は単身、ブリスベン行の飛行機に乗りました。

■2012年の円卓会議

ここで少しだけ、2年前（2012年）の話題になります。この年の8月、第12回アジアオセアニア性科学学会が島根県松江市で開かれました。

ある日、実行委員の方から英文のメールが転送されてきました。アントン（当時はお互いにまだ知り合っていません）からのもので、YOUTH INITIATIVEが立ち上がった経緯、これからYOUTH INITIATIVEを盛り上げたい想い、そのために若者円卓会議を開催したいこと、などが書かれていました。長文でしたが想いはひしひしと伝わってきました。メールの中には一緒に準備をしてくれる人物が必要だというようなことも書いてあり、それを読んだ時点で私は即座に参加を決めました。資金はどうするのか、参加者はどう集めるのか、などのハードルが浮上しましたが、周りの方々のことも巻き込みながら、ハードルを次々になぎ倒し、開催にこぎつけました。YOUTH INITIATIVEにとってもこれが初めての円卓会議でした。

心配された参加者数についても、蓋を開けてみれば20名を超える立派な集まりとなりました。しかし、ほとんどは日本人の参加者でした。海外からの参加者はほんの数名でした。参加者数が多かったことから最初にグループを2つに分けました。2つのグループが同時進行で同じテーマを30分話し、そのあと互いにシェアリングするという形式で進めました。

出したテーマは全部で3つで、「若者の性の健康を阻害する要因」、「若者の性の健康を促進するために必要な政策」、「性の健康分野の若者活動家の活動を促進する要因」というものでした。一見堅そうなディスカッションテーマですが、テーブルごとに問題意識の方向性も議論の仕方も異なっており、内容も濃く面白いものでした。日本人中心でしたので、自然と日本語

での議論となりました（海外からの参加者には個別に通訳に入りました）。日本人同士の日本語での話し合いですので活発にできました。一方、参加者の人数が多かったため、限られた時間の中でより多くの人が十分に発言する時間が取れないという面もありました。また、参加者の多くが日本人であったことで、海外との比較ができにくかったようでした。

松江の円卓会議を皮切りに、秋にはヨーロッパとラテンアメリカの性科学学会でも円卓会議が行われました。3つの円卓会議を通じて同じテーマで議論がされました。それぞれの記録を読んでもと、世界的に共通している事柄があれば、その地域の会議でしか話題に出てこないものもあり、国際的な比較がある程度できました。私はこの松江での円卓会議後に正式メンバーとして YOUTH INITIATIVE に迎えられました。

■参加者の素顔と4つのテーマ

話は2014年10月に戻ります。私は学会が始まる前日に現地入りしました。現地でも参加者を集めようと運動し、オープニングセレモニーの中でも呼びかけてもらいました。現地で知り合った人にも参加を呼びかけました。日本からメールを送った方たちにもお礼の方々声をかけました。アントンも円卓会議の前日に現地に到着し、2年ぶりの再会となりました。

円卓会議は最終日に開かれました。当日の朝、円卓会議で使うスライドデータを整理し、共同座長を務めるアントンとの打ち合わせを終え、10時30分から円卓会議はスタートしました。最後まで心配した参加者は、全アジアオセアニア地域から、総勢なんと！……4人（共同座長の2人を含めると6人）。2012年のときと比べるとだいぶスリムなかたちでの開催となりました。参加者は、オーストラリアでピアエデュケーションの活動をしている大学院生2人、日本の大学院生2人、そして私とアントン。ほかに、オブザーバーが5、6人でした。

自己紹介から始まりました。「名前」「出身国」「所属」「性の健康の分野で最も関心のある話題」「自由に一言」を順に英語で発言しました。

続いて、YOUTH INITIATIVE の紹介やこれまでの円卓会議のレビューなどをプレゼンテーションし、共有しました。参加者は4人のうち3人が円卓会議初



アントンと筆者

参加で、YOUTH INITIATIVE のことや過去の経過を知らないこともあり、真剣に聴いてくれていました。

その後、新版「性の権利宣言」について共有しました。前日行われた別のセッションで新版「性の権利宣言」についてはかなり詳細に説明されていたこともあり、円卓会議の場では、全体的な概要をさらうかたちでの共有となりました。参加者からは、「自分の国で性に関して話を始める際のいいきっかけになる」などの声がありました。いよいよディスカッションの開始です。今回は4つのテーマを用意しました。

- ①アジアオセアニアの若者の性の権利の阻害要因
- ②アジアオセアニアの若者の性の権利を推進するために必要な政策
- ③若者と、性の喜び（満足）と健康への権利
- ④新しい「性の権利宣言」への若者の取り組み

テーマを区切って示しながら進めました。比較的カジュアルな雰囲気の中で進んだためか、テーマから敷衍した話題などいろいろと飛び出しました。

途中15分の休憩を挟み2時間半。ラウンジに並んでいるコーヒーなどを飲みながらの15分間の休憩では談笑などもあり、言語のハンデを多少感じた部分もありつつも、ハートの通じ合った時間を過ごした円卓会議でした。

4つのテーマを通じて参加者から出た主な論点は次のとおりです。

- ・若者への公式な性教育の欠如はオーストラリアでも日本でも大きな問題である。
- ・一般的な性教育には、性の喜び・満足（に関する話題）、LGBTの話題、他者との関係性をどう育むかのスキルに関する事柄が入っていない。
- ・親や教師にとって性の喜び・満足の話題は「大きな



円卓会議の参加者

タブー」であり続けている。

- ピアエデュケーションは性の喜び・満足を若者と一緒に話すための最も良い手段の1つである。
- 日本社会はとても保守的で男性支配的である。
- 若者はセクシュアリティに関する情報の多くを雑誌とインターネットから得ている。
- セク스팅（性的なテキストメッセージまたは写真を携帯電話間で送る行為）やリベンジポルノは新しい技術が絡んでいる問題の1つである。
- 新しい「性の権利宣言」をユースフレンドリー（若者が親しみやすい）なカタチへ発展させることが必要である。

個人的には、「若者と、性の喜び（満足）と健康への権利」について話した場面が印象的でした。オーストラリアからの参加者は、性の喜び・満足（sexual pleasure）というテーマについてしっかりと意見を述べていました。一方、私も含めて日本からの参加者はなかなか自らの意見をまとめられませんでした。

この円卓会議で、私はこれまでの活動についての反省点を発見することができました。これまで避妊や性感染症といった話をすることが多かったのですが、それだけでなくもっとポジティブな語り口というものがあったのではないかと気づきました。「日本は衛生的、医学的、といったことは得意だが、満足とか喜びという方向で性を語る文化はあまりないように思う。性に関する pleasure（喜び・満足）よりも pressure（圧力・プレッシャー）の方が多いかもしれない」というようなことを伝えました。

今回は参加人数こそ前回よりも少なかったのですが、その分ひとりひとりの発言時間を確保できました。またオーストラリアと日本の参加者の人数がバランスが

とれていたことから、両国事情の情報交換もすることができました。言語が英語であったこともあり、前回とは違った会議風景になったと感じています。

今後の課題や展開も見えてきた部分があり、非常に多い時間になったと感じています。

■なぜ若者円卓会議が企画されたのか

最後に、若者円卓会議開催の意義とこれからの展開について少し触れてみたいと思います。2012年当時、私が受けた説明はおおよそ以下のような内容でした。

YOUTH INITIATIVE は「21世紀の若者の性の健康」に関して国際的な規模で状況を把握することを大きな目標として、そのために世界各地の WAS 関連団体などにアンケートを送付し、得られたデータをさらに有効なものにするために地域ごとの円卓会議を開催する。

円卓会議では、「若者の性の健康を阻害する要因」、「若者の性の健康を促進するために必要な政策」、「性の健康分野の若者活動家の活動を促進する要因」を中心に意見を募り、それらの意見をもとに若者の性の健康に貢献できるような具体的なアクションを考える。

円卓会議の議事録を読むとある程度の国際比較ができ、どのようなことで世界の若者の性の健康に貢献できるのか、YOUTH INITIATIVE が何ができるのか、を考えていくことができます。

実際に主催することで見えてきたことや感じていることもあります。参加してくれる若者活動家や若手研究者の中には、自身のコミュニティの中で素晴らしい実績を上げている人も少なくありません。そうした人たちがつながりあって、お互いにエンパワーしあったり、情報交換をし、そこから新しい企画が生まれるといったネットワーキングの機能も果たしているように思います。

私たちはいま、FACEBOOK や Twitter などの SNS を活用することができ、世界中どこにいてもつながりを維持することが容易にできます。YOUTH INITIATIVE として、これまでのすべての円卓会議の参加者がさらにつながっていきやすい仕掛けや仕組みを作っていく役割もあると感じています。若者世代の声が適切に反映されるように働きかけるためにも、若者円卓会議のような場は効果的です。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第22回 結婚・性科学・性教育に関する展覧会

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士（保健学）

今回は香川県立高松高校の女性教員や女子生徒が参加した座談会（1949年6月）から、性教育についての教員の認識や生徒の要望をみました。その3か月ほど前には、この高松高校（当時・高松女子高校）の教室を会場にして、「育児と結婚の展覧会」を開催する計画も報じられています⁽¹⁾。今回は、この頃、日本の各地で開催された結婚や性科学や性教育に関する展覧会について述べたいと思います。

本連載の第7回で日本性教育協会、第20回で北海道純潔教育委員会などが主催した展覧会について触れましたが、これらも含めて、判明した範囲で展覧会の開催状況をまとめたのが、下の表です。紙幅の関係で表には後援団体を掲載していませんが、多くの場合、行政（都道府県の衛生部など）が後援し、ほとんどの場合、新聞社が主催もしくは後援しています。どの程度の関与があったのかは不明ですが、軍政部が展覧会を視察したことを報じる新聞記事も散見されます⁽²⁾。また、多くが百貨店で開催されているのも特徴的です。例えば、佐賀の玉屋デパートで1949年7月16日から開催された「結婚と性の科学展覧会」は、当初8月7日までの予定だった会期が、17日まで延長され、さらに20日まで再延長されています。『佐賀新聞』には、「ついに入

場者の新記録をつくった好評の一大性典『結婚と性の科学展』 皆さまの要望に応え十七日まで日延べ 会場玉屋」という8月4日の広告も含め、7月から8月にかけてこの展覧会についての玉屋の広告が11回も掲載されています。百貨店にとっても、非常に大きな集客力のある魅力的な催しであったことがうかがえます。

これらの展覧会は、明治中期から昭和40年代ごろまで開催されていた「衛生展覧会」⁽³⁾の一環であると位置づけてよいと考えます。ではなぜ、この時期に、結婚や性科学や性教育に関する展覧会が日本の各地で開催されていたのかというと、1948年には性病予防法や優生保護法が成立・施行、翌49年には優生保護法に経済的理由による中絶を容認する規定も追加されているように、①終戦直後爆発的に急増していた梅毒などの性感染症への対策、②第1次ベビーブーム（1947年～49年）によって懸念され始めた過剰人口問題への対策、といった背景がその理由にあげられます。

（注）

- ①『四国新聞』1949年3月15日 p.2。結果的にこの展覧会は高松高校ではなく高松市文化会館で開催されています。
- ②『読売新聞』1948年6月10日朝刊 p.2、『佐賀新聞』1949年7月17日 p.2、など。
- ③衛生展覧会とは「衛生に関するさまざまな展示を行い、病気の知識や人体の構造、日頃の衛生的心得などについて見学者に教えようという啓蒙的な催し」（田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社1994年 p.7）。

表 結婚・性科学・性教育に関する展覧会（1949年前後）

都道府県	展覧会の名称	会 場	会 期	主 催
北海道	性病撲滅展覧会	三越（札幌市）	1948年4月1日から7日	北海道庁衛生部
	結婚と性教育展覧会	丸井今井百貨店（札幌市）	1949年4月15日から24日、その後、北海道の各地を巡回	北海道純潔教育委員会ほか
宮城	性の科学展結婚の展覧会	三越（仙台市）	1948年11月13日から28日	—（河北新報社などが後援）
群馬	新しい結婚の展覧会	前橋商工会議所（前橋市）	1948年12月9日から15日	
		高島屋（高崎市）	1948年12月18日から28日	優生結婚普及会
		矢野呉服店跡（桐生市）	1949年1月1日から8日	
東京	性の科学展覧会	松屋百貨店（浅草）	1948年6月10日から7月30日	日本性病予防協会・読売新聞社
	正しい結婚と性の教育展覧会	東横百貨店（渋谷）	1949年7月30日から8月21日の土・日曜	日本性教育協会
	正しい男女交際と幸福なる結婚生活展覧会	伊勢丹（新宿）	1950年1月4日から29日	日本性教育協会
新潟	結婚の展覧会	小林百貨店（新潟市）	1948年8月ごろ	—
富山	母と子の性教育展覧会	大和高岡店（高岡市）	1949年5月10日から15日	中部日本新聞社
愛知	産児制限展覧会	丸栄百貨店（名古屋市中区）	1949年7月3日から25日	中部日本新聞社
京都	正しい産児制限展覧会	丸物百貨店（京都市）	1949年7月14日から21日	京都晩婦人会
大阪	性病予防展覧会	藤井寺保健所（藤井寺町）	1949年8月6日から11日	藤井寺町など保健所管内11町村
	結婚と性の科学展覧会	福屋百貨店（広島市）	1949年1月7日から31日	日本性病予防協会
広島	結婚と性の科学展覧会	二河公園児童館（呉市）	1949年5月から6月ごろ	日本性病予防協会・中国新聞社
香川	結婚と育児の展覧会	高松文化会館（高松市）	1949年4月5日から24日	母子愛育会香川県支部
愛媛	結婚と性の科学展覧会	愛媛新聞館（松山市）	1949年3月20日から5月5日	愛媛新聞・日本性病予防協会
	産児制限展覧会	三越（松山市）	1949年8月25日から9月15日	大阪新聞社
福岡	結婚の展覧会	小倉井筒屋（小倉市）	1949年7月17日まで	—
	結婚と純潔のための性の科学展覧会	岩田屋（福岡市）	1949年5月から6月ごろ	西日本新聞社
佐賀	結婚と性の科学展覧会	玉屋デパート（佐賀市）	1949年7月16日から8月20日	佐賀新聞社・西日本新聞社佐賀支局
	結婚の展覧会	浜屋デパート（長崎市）	1949年7月23日から8月4日	優生結婚普及会
長崎	性の信仰と科学展覧会	浜屋デパート（長崎市）	1949年10月1日から	長崎民友新聞社
	結婚と性の科学展覧会	玉屋デパート（佐世保市）	1949年8月20日から9月18日	佐世保時事新聞社
	性犯罪展覧会	玉屋デパート（佐世保市）	1949年10月8日から23日	佐世保時事新聞社
大分	性犯罪展覧会	トキハ百貨店（大分市）	1949年9月21日から10月2日	日本法律新聞社
鹿児島	性の信仰と科学	山形屋（鹿児島市）	1949年7月26日から8月14日	—

表中の「—」は、筆者の調査が及んでおらず不明を意味する。

人は物事を判断するとき、結局は自分自身の知識、経験、価値観で決めてしまいます。だからこそ、自分自身が正しいと思った知識を伝えたいのですが、正しいと思われることは時代と共に変わります。

早乙女先生が「セックスでもマスターベーションでもイカなくてもいい。オーガズムを得るのは、知識と経験、そして少しの偶然からなるのではないのでしょうか。目的、ではなく結果と考えたらいいのかもしれない」とのメッセージはすごく私のなかに響きました。しかし、思春期の若者に、このメッセージを伝えたとしても、「アダルトビデオに出てくるセックスシーンではすべての女性がオーガズムを得ているので、そんな気休めを言われても困る」と思うことでしょう。

* *

ワンパターンの男が変わった？

筆者が高校生の時にドキドキしながら購入した「How To Sex」の著者の奈良林祥先生は、男の性欲は「興奮→勃起→射精→満足→おしまい」というシンプルなワンパターンだとおっしゃっていましたし、自分自身もこれが男の性欲をわかりやすく紹介した正解だと思っていました。しかし、最近ではAセクシュアル（無性愛：asexuality）という方の存在も明らかになるだけではなく、そもそも性欲はあまりわからないという男性も少なくありません。リアルな女性には興味がなく、二次元、バーチャルな世界だけで恋をしているというのは当たり前の状況になってきました。

講演では「二次元もいいけど、リアル（三次元）にもチャレンジしよう」と呼びかけているものの、その一方で「本人がよければそれでいいんじゃないの」と思っている自分がいます。すなわち、性については所詮一人ひとりの価値観も、選択肢も異なるので、誰かがこうすべしと指示できることでも、押し付けられるものでもないはず。ところがそう思わない、そう思えない人が多いことは多くの方も気づいています。

* *

「性」には正解がない

性教育に携わっていると、「正しい知識を伝えてほしい」とよく言われます。しかし、自分の患者さんたちは、正しい知識がなかったから性感染症に、HIVに感染したわけではありません。また、確かに性感染症や望まない妊娠といった性のトラブルに巻き込まれないほうがいいでしょうが、性のトラブルも、「知識と経験、そして少しの偶然からなる結果」と考えると私自身はすっきりします。でもこんなことを学校現場で言おうものなら、「何のための性教育ですか？」と叱られてしまいます。

* *

「正解」があると教える日本式教育

中学校まで義務教育で、高校への進学率も異常に高い日本ですが、残念ながら考える力が弱いということが以前から指摘され続けてきました。その理由を教員の方が教えてくださいました。

日本の教育は「正解は〇〇です」というところから始まります。例えば「卵子と精子が合体することで受精が成立し、受精卵が子宮内膜に着床して妊娠が成立します」と教えます。ところが少し考える力がある子だと「どうすれば男性の体の中の精子が、女性の体の中の卵子と出会えるのですか」という疑問にたどり着きます。しかし、日本の学校で行われている保健の教育は、「精子と卵子が合体することで受精、そして妊娠が成立する」という正解を教えるためにあり、「どのような行為で妊娠が成立するか」を考えさせるために行われているわけではありません。

問題：以下の○のところに正解を書きなさい。

受精は○と○が出会い、合体した時に成立します。

①精子と卵子

②男と女

③男性のペニスと女性の膣

正解は①です。何故ならば、男と女の合体とは必ず



しも性器の結合を意味しません。男性のペニスと女性の膣が合体したからと言って必ずしも受精は成立しません。すなわち②と③は不正解です。

* *

「何故」という語彙がない学校教育現場

「何故、妊娠は成立するのか？」という単純な質問を投げかけ、考え、答えにたどり着くことができれば、その学習過程で身に着けた様々なことが他のいろんな問題の解決にも役立ちます。しかし、「何故」という言葉がすぐに出ないのが日本人だということをエイズパニックの頃にいやというほど経験させてもらっていました。しかし、残念ながらその時はこの大切な事実に気がつきませんでした。

HIV（エイズウイルス）に感染しないためには、刺青、薬物の回し打ち、輸血、医療関係者の針刺し事故を除けばノーセックスかコンドームしかありません。しかし、「このような人は感染しない」という正解を探す「正解脳」に育て上げられた人たちがたどり着いた正解は「不特定多数の人とセックスをしない人」、「結婚まで純潔でいる人」でした。若者たちの感染予防に対する彼らの正解はノーセックスだけでした。非常にわかりやすいこの発想に20年以上前に気づいていればもう少し上手に教育現場と連携できたと反省です。「コンドームをしていれば大丈夫じゃないか？」と反論しても、「コンドームは100%有効ではない」と切り返されるだけで、コンドームは永遠に正解にはなれないことに早く気づくべきでした。

* *

性科学が浸透しないのは

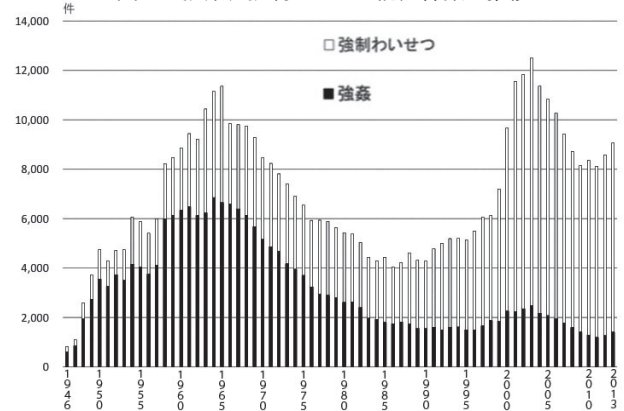
Wikipediaに「科学とは体系化された知識や経験の総称」とあり、「性科学」は性に関する多くの人の知識や経験を体系化したものと捉えられます。しかし、日本でこの性科学がなかなか浸透しません。その理由は、誰もが納得できる正解を示せて初めて科学として認める風潮があるからと感じています。しかし、性科学は必ずしも正解を示すものでも、万人が納得できることを示すものでもなく、多くの人の知識や経験を体系化したものです。一方で、性に関する知識や経験はあまりにも一人ひとりで異なるため、それを体系化し、科学することは未だに困難を極めることです。

* *

性は社会と共に変わるのか

犯罪予防も健康づくりと考えた時、強姦と強制わいせつのデータの解釈に悩んでいました。戦後増え続けていたこれらの犯罪は東京オリンピックの翌年をピークに減少したものの、バブルの崩壊と共に増加し、2003年をピークにまた減少しました。何故、1965年や2003年に性犯罪がピークに達し、1990年ごろが底だったのでしょうか。

図1 強姦、強制わいせつ認知件数の推移¹⁾



東京オリンピックといえば経済復興の象徴のように言われていますが、逆に一人ひとりの国民はまだ十分にその恩恵に預かっていなかったのかもしれない。バブルの崩壊は確かに一人ひとりの国民の生活に経済面から多くの負荷をかけ、こころが荒み、性犯罪が増えたという解釈もあり得ます。ただ、原因と結果という正解を求めるのではなく、このように考え続けることで、一人ひとりの性が豊かになることにつなげられることが最終目標ですが、これがまた難しいのです。

性の情報でぜひ欲しいと思っても入手できないのが、異性愛者、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）、Aセクシュアルの割合の推移です。この割合が常に一定であれば、セクシュアリティは先天的なものと言えるのですが、そうでなければ、社会の変化と性の関係性について考えるための基礎資料となります。もっとも、そのためには彼らの存在を国が認めることが先ですね。

何故、岩室紳也が思春期にリアルに対する性欲が高まったのか。この不思議、偶然を解明するためにも、もう少し悩み続けたいと思っています。

1) <http://hakusyol.moj.go.jp/jp/61/nfm/mokuji.html>

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

ある死産と出産の体験

40歳を目前に、思いがけない妊娠と結婚。妊娠7か月での死産とその後の再妊娠。困惑や期待、深い悲しみと喜びを体験した著者の計17か月間の妊婦生活を描いたコミックエッセイである。

生理が来ない、便秘、のぼせ……ときて、著者の頭に真っ先に浮かんだのは「更年期!？」。そんな妊娠発覚は多少の戸惑いをもたらすものの、産むことを決意。産後も復帰できる仕事、家事ができる男性の存在、精神的な余裕があってこそその判断だったと著者はいう。「とくに子どもが欲しかったわけではない」と思っていたふたりは、妊娠にともなう新たな体験を共有しながら、ときにもめつつ、安定期を迎える。

そして、思いもよらない日がやってくる。大きなお腹にも慣れてきた7か月目の検診で、胎児の心臓が止まっていることを知らされるのだ。死んでしまった赤ちゃんをお腹に、妊婦ばかりの産婦人科をあとにする筆者。数日後の「処置」では、麻酔もなく強烈な痛みのなかで死産という「出産」をする。

妊娠したからといって必ずしも無事に出産できるとはかぎらない、というのはだれでも知っている。しかし、頭でわかっている、お腹のなかの赤ちゃんは生まれてくるものだと思っている。死産という現実、ハッピー満載の育児雑誌で取り上げられることはなく、なにより死産の現場である産婦人科の病院でさえ、死産した妊婦へのサポート体制や設備は十分ではない。

知らされることも、語られることも少ない死産という経験。今は、ネット上で死産にまつわる経験も書かれており、そうした場を通して、つらい気持ちを吐露したり、わかちあったりすることはできる。しかし、著者は「いつまで悪露おろが続くのか？」というような具体的な情報が知りたかったという。そのため、本書で



妊娠17ヵ月！ 40代で母になる！

坂井恵理著
講談社
定価 743 円＋税

は死産の具体的な体験がたくさん描かれている。産婦人科医の宋美玄氏のミニ解説も収録され、妊娠した人もしていない人にもわかりやすいからだのテキストにもなっている。子宮内膜症の話題も含まれている。

性にまつわる生と死、それが本書の大きなテーマであるが、もう一つ、綴られているのが、「子どもが欲しかったわけではない」という筆者の気持ちを形成した家族の話だ。家事や子育てには一切関与しなかった会社員の父親と専業主婦の母親、弟との4人家族の長女として生まれた筆者は、母親の愚痴の聞き役として育つ。母親は若くしてガンで亡くなるが、そのガン治療の入院時ですら「仕出し弁当は、飽きるから」と言い放った父親。自分が何かやるでもなければ、母親の肩代わりをする娘をねぎらうわけでもない。亡くなった母親からは「男の子なのに料理させてごめんね」という手紙が弟に遺される（ちなみに弟は料理好き男子）。

「子育ては大変」「子どもは欲しくない」という意識を形づくるのは、女性が“社会進出”したせいではない。社会に出る前の“家族”の経験のなかで、女性たちはそう考えざるを得なくなる。身近な男性たちがいかに“家族”に関わるか、いや、関わるというより彼ら自身がどんな“家族”であるか、それを見ながら子どもたちは育つのだ。本書は、新たな子どもと出会う出産体験を通して、自分自身の子ども時代をふりかえる物語ともいえるだろう。

死産の場面では、読んでいる私も涙が止まらず、無事の出産を喜ぶ様子にはまた涙。でも、目立たないマタニティマークの代わりに「妊人（うむんちゅ）」と書かれたTシャツを発案するなど、随所の小ネタに爆笑させられる。泣いて笑って、そして読み終えたときに思いを至らすのは、自分が生きてきた家族の光景。未来の“家族”という社会をつくっていくのは、これまでの“家族”体験であることを痛感させられる。

（大阪大学准教授 野坂祐子）

▶▶ 2月13日(金) 9:30~16:40 ◀◀

第15回九州ブロック性教育研究大会 第19回熊本県性教育研究大会

テーマ 子どもたちの様々なニーズに対応する性教育Ⅲ
～おとなに実践していただきたいこと～

内容 **特別講演**「学校における性に関する現代的課題～保健指導の実践を通して～」森良一(文部科学省スポーツ・健康局教科調査官)。**講演**「若者に何故、HIV感染が広がっているのか～性的指向の理解と学校での支援の重要性～」日高庸晴(宝塚大学)ほか。**シンポジウム**「学校における性教育の指導・支援の内容～今求められている性に関する現代的課題を見据えて～」。

会場 くまもと県民交流会館「パレア」
(熊本市中央区手取里本町8-9)

定員・参加費・問い合わせ

参加費／3,500円、学生1,000円
定員／300名
問合せ先／E-mail shisokun@crv.bbq.jp
FAX 096-383-2810

▶▶ 3月21日(土)～22日(日) ◀◀

GID(性同一性障害)学会第17回研究大会 ～トランスジェンダーの健康と権利～

国際的診断基準であるDSM-5からGIDの名称消え、GD(性別違和)に変更されました。世界は「トランスジェンダーの健康と権利」をキーワードに大きく変わろうとしています。

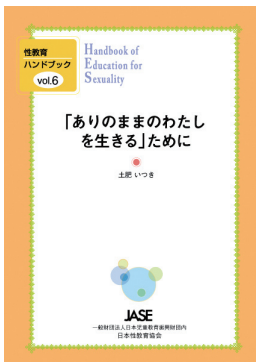
内容 ①特別講演、②シンポジウム、③一般演題
④パネルディスカッション、⑤ワークショップ、⑥学術展示、ほか。

シンポジウムのテーマ GID医療とケアの最前線、GID医療と健康保険適用、生きづらさとレジリエンス、性別承認のポリティクスと特例法、児童・思春期の性別違和、ほか。

会場 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス
(大阪府堺市中区学園町1-1)

参加費・問い合わせ

参加費/3,000円(学生1,000円)
大会事務局 大阪府立大学教育福祉学類 東研究室(担当:花田)
TEL 072-252-1161 内線2595 FAX 072-254-9793
Email: gid17osaka@gmail.com



性教育ハンドブック Vol.6

好評発売中!

『「ありのままのわたしを生きる」ために』

土肥いつき 著

◆A5判:86頁、頒価500円

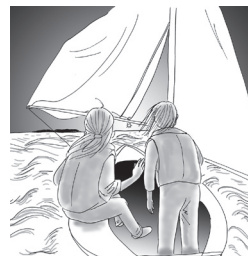
『現代性教育研究ジャーナル』に3年間連載された、「性別違和」である作者が悩みや葛藤の中で紡いできたありのままを語る自叙伝です。両親や友達との出会いの中で小さなトゲのような違和感を心の中の小さな箱の中にしまい込み、教員生活を送り、Jさんと出会い、そしてSRSに向かい、女性として生きるわたしの航海を描いた新刊です。

主な内容

港にて(自分史の試み…) / 船出のとき(小さなトゲのような思い…) / 帆をあげる(教員生活のはじまり…) / 舵を切る(「身体改造」開始…) / 嵐の中で / かくすかに見えた航路 / 新たな旅へ

著者プロフィール

1985年より京都府立高校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表、トランスジェンダー生徒交流会世話人、まんまるの会(関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会)世話人代表など。映画『coming out story』に出演。



既刊〈性教育ハンドブック〉

☆性教育ハンドブック Vol.5 『21世紀の課題=今こそ、エイズを考える』池上千寿子著 A5判・68頁500円

☆性教育ハンドブック Vol.4 『性教育の歴史を尋ねる～戦前編～』茂木輝順著 A5判・92頁500円

※送料:1冊215円、2～3冊300円、4冊～6冊350円。

◆JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。
または、Email info_jase@faje.or.jp
TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478